様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３１１７

研究課題名（和文）近世イングランド演劇の上演史における「男性美」観の変遷

研究課題名（英文）The Changes in the Perception of 'Male Beauty' in the Peformance History of Early Modern English Drama

研究代表者
北村　紗衣（Kitamura, Sae）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：００７３３８２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ウィリアム・シェイクスピアの作品をはじめとする近世イングランド演劇の上演史において、男性登場人物の性的魅力や美に関する考え方はどのように変化してきたのかという問いを探求するものである。2019年度に開始したが、2020年度以降は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、予定していた海外文書館での調査などがほぼ実施できなかった。研究成果としては、期間中に査読論文を4本（うち2本は英語）刊行した他、劇評と研究ノートを1本ずつ、また一般向けの研究成果紹介を含む単著の書籍を1冊刊行した。また、学会発表を6回（うち3回は国際学会）行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまであまり研究されてこなかったシェイクスピア劇における男性美の表現について探求し、論文や学会発表、一般向けの書籍などを通じて論じることで、ルッキズムの問題や人種表象についてより広い視点で考えることに貢献できたと考えている。また、アイドル文化の研究やファンダム研究といったポピュラーカルチャー研究の分野と近世イングランド演劇を接続することにも貢献できたと考えている。本研究は役者や演出を扱うものでもあり、実際に上演を行う際の演出の一助ともなるのではないかと考えている。

研究成果の概要（英文）：This research project explores the question of how the views on sexual attractiveness and beauty of male characters have changed in the performance history of early modern English drama, especially Shakespeare's plays. It started in 2019, but because of the influence of the COVID-19 pandemic after 2020, planned research trips to overseas archives were not conducted. In this research project, four peer-reviewed articles (of which two are in English) were published, in addition to one theatrical review, one research note, and one book-length monograph for general public including an introductory explanation of the research. The research results also include six academic presentations (of which three are at international conferences).

研究分野：シェイクスピア研究

キーワード：シェイクスピア　近世イングランド演劇　ファン研究　舞台芸術史　セクシュアリティ　ジェンダー　ルッキズム　人種差別

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

本研究のきっかけとなったのは、2015 年夏、ロンドンのバービカン劇場で行われたベネディクト・カンバーバッチ主演の『ハムレット』公演である。本プロダクションでタイトルロールを演じたカンバーバッチは BBC のテレビドラマ『シャーロック』などで主演をつとめた英国のスターであったため、通常はシェイクスピアを見に来ないような観客、とりわけ世界各地の若い女性の観客がこの公演に高い関心を示した。バービカン劇場は公演の際、祝祭的な雰囲気を演出するため、この上演に関するツイッター上での一般客の反応を拾って劇場ロビーにプロジェクタで映すということを行っていたが、反応の多くがハムレットというキャラクターとそれを演じたカンバーバッチの魅力に言及するものであった。『ハムレット』のようなシェイクスピアをはじめとする近世イングランド演劇が現在、上演される際には、主演をつとめるスターの美貌や性的魅力がマーケティングにおいて非常に重要なものとみなされている。舞台芸術のマーケティングやファンによる受容を考える際には、戯曲そのものに内在するキャラクターの美や性的魅力の問題を考えることが必要であると考えるに至った。上演回数が多く、スターを活躍させる出し物と見なされているシェイクスピアはこうした研究に最適の対象であると考えられ、また研究成果が実際の上演になんらかの形で貢献できる可能性があるという点からしても、こうした方向性からの研究を行う意義があると考えた。

## ２．研究の目的

本研究は、16 世紀末から 21 世紀初頭までの英国における近世イングランド演劇上演史において、男性美に対する考え方がどのように変遷したかをある程度見通しよくマッピングすることを目指した。近世イングランドの社会一般において、男性の美や性的魅力がどのようにとらえられていたか、近世イングランド演劇においてどのように男性の美や性的魅力が描かれていたか、そして近世イングランド演劇の上演史において男性美観がいかに変遷したかを明らかにしようとした。現代については上演のみならず、映像作品の翻案やメディアでの報道なども視野に入れて男性美観の変化をとらえようとした。

## ３．研究の方法

データベースや文書館において、近世の戯曲テクストやそれ以外のさまざまな文書、上演映像などの資料の調査を行い、その分析を通して問いの答えを明らかにする。文書資料としては書簡や劇評、俳優の回顧録などを主な検討対象とする。また、とくに現代における動向を探るため、実際にライヴの上演を見てその分析も行う。

## ４．研究成果

これまであまり研究されてこなかったシェイクスピア劇における男性美の表現について探求し、論文や学会発表、一般向けの書籍などを通じて論じることで、ルッキズムの問題についてより広い視点で考えることに貢献できたと考えている。とくにルッキズムについては人種差別とのかかわりをより深く分析する必要があることがわかった。日本においては英語圏などに比べてブラックフェイスを用いた上演が長く残存しており、これは日本の演劇における容姿の捉え方と根強く結びついている。この研究の成果については雑誌 *Multicultural Shakespeare* のブラックフェイス特集号である‘Shakespeare, Blackface, and Performance: A Global Exploration’に東アジア圏の上演を扱ったものとしては唯一となる論文‘How Should You Perform and Watch *Othello* and *Hairspray* in a Country Where You Could Never Hire Black Actors? Shakespeare and Casting in Japan’を寄稿し、この分野の研究にある程度貢献できたと考えている。

また、アイドル文化の研究やファンダム研究といったポピュラーカルチャー研究の分野と近世イングランド演劇を接続することにも貢献できたと考えている。論文‘A Rose by Any Other Name May Smell Different’は日本におけるシェイクスピア映画の宣伝・マーケティングを扱った論文であり、本研究プロジェクトの成果については一部を含んでいるのみであるが、これまでほとんど論じられたことのないテーマを扱ったものである。論文「「美しい」王をどう表現するか？――『リチャード二世』の演出と受容」は、現代のポピュラーカルチャー研究に接近する論文があまり掲載されたことがない雑誌である『Shakespeare Journal』に掲載された。また、最終年度にシェイクスピア学会でセミナー「2010 年以降の日本／日本語のシェイクスピア上演を問う」の一部として行った学会発表である「若く美しく商業主義的な日本のアイドルシェイクスピア」は、これまでほとんど学術的な場で論じられたことがなく、また劇評もあまり刊行されていない、ア

イドルによるシェイクスピア上演という日本特有の上演形態を扱ったものであった。こうした議論を通して、他の研究者にとってあまり馴染みのないものである可能性もあるシェイクスピアと現代ポピュラーカルチャーの結び付きを知ってもらうという点で研究に貢献できたと考えている。「若く美しく商業主義的な日本のアイドルシェイクスピア」の学会発表については、今後さらに調査を実施して論文化する予定である。

なお、本研究は役者や演出を扱うものでもあり、実際に上演を行う際の演出の一助ともなるのではないかと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>北村紗衣 | ４．巻<br>54.1 |
| ２．論文標題<br>[研究ノート]フェイクニュースの島――ヘンリー・ネヴィルのThe Isle of Pinesを読む | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>人文学会雑誌 | ６．最初と最後の頁<br>116-151 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>北村紗衣 | ４．巻<br>8 |
| ２．論文標題<br>「美しい」王をどう表現するか？――『リチャード二世』の演出と受容 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>Shakespeare Journal | ６．最初と最後の頁<br>57-68 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Sae Kitamura | ４．巻<br>22 |
| ２．論文標題<br>How Should You Perform and Watch Othello and Hairspray in a Country Where You Could Never Hire Black Actors? Shakespeare and Casting in Japan | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>Multicultural Shakespeare: Translation, Appropriation and Performance | ６．最初と最後の頁<br>87～101 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.18778/2083-8530.22.06 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Sae Kitamura | ４．巻<br>33 |
| ２．論文標題<br>A Rose by Any Other Name May Smell Different | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>Critical Survey | ６．最初と最後の頁<br>59～71 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.3167/cs.2021.330105 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Sae Kitamura | 4．巻<br>37 |
| 2．論文標題<br>Hamlet dir. by Simon Godwin | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>Shakespeare Bulletin | 6．最初と最後の頁<br>587～591 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1353/shb.2019.0067 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>北村紗衣 | 4．巻<br>6 |
| 2．論文標題<br>我々にもオシァン・ジュビリー祭を！ーシェイクスピア・ジュビリー祭と、とあるスコットランドのファンの夢 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>Shakespeare Journal | 6．最初と最後の頁<br>11-21 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Kitamura Sae |
| 2．発表標題<br>How Did the First Female Public Speakers Make Themselves Heard? Actresses and Religious Preachers |
| 3．学会等名<br>RSA Virtual 2021（国際学会） |
| 4．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>北村紗衣 |
| 2．発表標題<br>ポスト『ゲーム・オブ・スローンズ』時代のシェイクスピア史劇 |
| 3．学会等名<br>シェイクスピア協会第2回オンライン研究会 |
| 4．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>北村紗衣 |
| ２．発表標題<br>フェイクニュースとリアリティショー～ヘンリー・ネヴィルのThe Isle of Pines を読む |
| ３．学会等名<br>日本英文学会第92回全国大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kitamura Sae |
| ２．発表標題<br>Sweet Breath and Stinking Breath in Early Modern English Drama |
| ３．学会等名<br>Tenth Blackfriars Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kitamura Sae |
| ２．発表標題<br>Did Richard II Really Break the Mirror on Stage? |
| ３．学会等名<br>RSA Virutal 2022（国際学会） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>北村紗衣 |
| ２．発表標題<br>若く美しく商業主義的な日本のアイドルシェイクスピア |
| ３．学会等名<br>第60回シェイクスピア学会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>北村　紗衣 | 4．発行年<br>2021年 |
| 2．出版社<br>筑摩書房 | 5．総ページ数<br>240 |
| 3．書名<br>批評の教室 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>ヘンリー・ジェンキンズ、渡部宏樹（訳）、北村紗衣（訳）、阿部康人（訳） | 4．発行年<br>2021年 |
| 2．出版社<br>晶文社 | 5．総ページ数<br>556 |
| 3．書名<br>コンヴァージェンス・カルチャー | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|